

大学院看護学研究科看護学専攻	
学籍番号	DN1601
氏 名	小池 伝一 (コイケ タダカズ)
学位の種類	博士 (看護学)
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 2 項該当
論文題目	在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験
主指導教員	横山 由美 教授
副指導教員	春山 早苗 教授
	大塚 公一郎 教授
論文審査委員	主査： 成田 伸 教授
	副査： 上野 まり 教授
	副査： 横山 由美 教授

最終試験の結果の要旨

1) 研究テーマの目的の明確性および広域実践看護学分野の目的と適合性

本研究の研究課題は「在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療的処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験」を明らかにすることであり、その目的は明確である。在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親の、新たな医療処置導入の意思決定に影響する要因を明らかにすることは、医療処置を導入しながら在宅で生活する児と母親への看護支援、社会的支援システムの検討にもつながり、広域実践看護学分野の目的とも適合している。

2) 研究の独創性・革新性

本研究は、意思決定のメタ判断、決定プロセス、決定の結果・評価とつながる印南の理論に基づき、医療処置導入後に在宅で養育する経験という決定の評価は、新たな医療処置導入の意思決定に影響する可能性が高い一方で、決定の評価が、新たな医療処置導入の意思決定にどのように影響するかは先行研究でまだ明らかにされていないと主張し、それを

明らかにしようとしたものであり、革新性がある。また、在宅で養育し、新たな医療処置導入を意思決定した母親の語りから、ライフストーリー法を用いて、その経験を明らかにするという本研究には、独創性がある。

3) 実践的意義、社会的意義

在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療的処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験を明らかにすることは、在宅での生活を継続できるような支援への示唆が得られること、適切な時期の医療処置導入に向けた母親への看護支援への示唆が得られること、医療処置導入の意思決定にかかわる病棟・外来看護、在宅生活支援につながる示唆が得られることから、実践的意義、社会的意義、広域実践看護学としての意義がある。

4) 研究方法の妥当性

医療処置導入後に在宅で児を養育した経験についての母親自身の評価が、新たな医療処置の意思決定にどう影響したかを明らかにしようとする本研究の目的を考えた場合、ひとりひとりの母親の語りから分析される経験を重視する桜井のライフストーリー法は、用いる研究方法として妥当である。また、ローデータとなる3人の母親の語りには、研究目的である「医療処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験」が十分語られていることは確認できた。

研究方法については、これまでの審査での指摘を受け、対象者それぞれの、語りからデータ、トピック、メイントピック抽出までの流れが、研究方法として明確に記載されるように修正されており、その流れは了解できるものであった。

また、結果から考察につながる一貫性についても、結果として抽出された、トピック、メイントピックから、対象者それぞれのストーリーを構築し、そこで得られた結果から、考察で焦点化された3点に繋がっており、前回審査時点で一貫性が確認できた。

5) 引用文献の適切性

引用の適切性が確認できた。

6) 論文の体系、論旨の一貫性

前回審査で指摘にあった、考察において、本研究で得られた結果を、社会的に、また臨床的にどのように活用すべきかについて、考察に追加され、十分に論じられていると判断できた。結果として、論文全体の論旨の一貫性が確認された。

以上より、博士論文としての審査基準を満たしているため、最終試験は合格と判定した。

以上